

氏名 川崎 麻央
ヨミガナ カワサキ マオ
学位の種類 博士（美術）
学位記番号 博美第534号
学位授与年月日 平成29年3月27日
学位論文等題目 〈論文〉 閃きと10のフェイズ
〈作品〉 解けよやもどけ
百の木草も天照らす

〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原幸雄
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚 雄二
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤 典彦
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	

（論文内容の要旨）

私にとっての創作行為とは、一瞬の閃きを確かな実在へと自身の内側から引きずり出す試みである。それは一瞬の閃光によって照らし出された自身の捉えどころのない心の質を、一つ一つ丁寧に思い出し、触れていく様な感覚である。とめどない連想と選択の果てに、閃きの姿は一枚の絵画となり、当初の鮮やかな鋭さを纏って私の前に立ち顕れる。

本論文では、自己の創作プロセスを10のフェイズ（段階）に分けて論じた。10のフェイズとは、禅画の「十牛図」からヒントを得たものである。「十牛図」とは、真の自己ないしは悟りを牛に見立て、これを探し求めていく道筋を十の図で表したものである。私はこの「十牛図」と出会って、混沌と分散した自分の創作方法・考え・目標・集中力が、一つの方向へ集結・凝縮し、流れ出すような感動をおぼえた。「十牛図」は、人の修行の過程を具体的に明示しているため、自分の創作過程を自ら分析し、自身を鼓舞するのに大変実用的で、如何なる人、年齢でも役立つ普遍的な実用書と言える。そこで、この「十牛図」を参考に自身の創作過程を考察することで、自身が自己を認識する指標としうるのではないかと考え、これを論文構成の軸とした。

一瞬の閃きは、絵画となって私の外に出なければ、真に自身の経験とすることはできない。私は私の経験を完了させるために、様々な試行錯誤を繰り返していく。自身の閃きに対し、どう挑み、実現化していたのか。本論文ではその閃きと創作の道程を、10のフェイズで明示した。

本論文は3章で構成される。

第1章「閃きと10のフェイズ」では、閃きと創作プロセスの概念を述べた。第1節「閃きの構造」では、普段の制作現場で実際に私が閃きを得ている「墨流し・石」「コラージュ・過去の創作資料」をキーワー

ドに、自己の創作における着想の仕方を具体的に述べ、閃きの構造は、既存の要素の新しい組み合わせでしかないという事実を、それによって生まれた自作品と共に論じた。「墨流し・石」は、流動と静止という矛盾する動きを同時に持ち、捉えどころのない予感に満ちた質がある。渦模様や地層、結晶配列などの名もなき模様は、私の潜在欲求を思い出させるように、イメージをビジュアルとして引き出ししてくれる。「コラージュ・過去の創作資料」では、「全体は部分の総和ではない」というゲシュタルトの基本原理を用いながら、部分の総和以上の何かを見てしまう人間の習慣が、分解と再構成を繰り返すコラージュや、過去の創作資料を眺めることで、そこから思いがけないイメージを生み出す事実について述べた。第2節「十牛図」では、十牛図の解説を踏まえながら、十牛図で人が牛を追いかけていく世界観と、創作過程で私が閃きを追いかけていく様との合致を示し、自己の創作プロセスも、10のフェイズで明示することが可能であることを論じた。

第2章「創作プロセスにおける4つのプロセス」では、自己の創作プロセスの10のフェイズを、4段階に区分し具体的に論じた。第1節は、「閃き」と「構想」をテーマとした。1.「閃き」では、閃きと出会う内的なフェイズが、一瞬の閃きから次々に連想を生み、イメージが一気に膨らんでいくきっかけを述べた。2.「構想」では、膨らんだイメージを具体的に収集、選択し、イメージを凝縮していく構想的フェイズについて述べ、自分にとって、捉えることが難しい対象に臨むことで、自己の新しい潜在性が引き出されていく様子を示した。第2節は、「決断」と「本画」をテーマとした。3.「決断」では、素描や下図を制作しながら、様々に構想したイメージを、一つの画面に決断するフェイズについて述べた。対象の様々な動きやスピード感といった、客観的な質と主観的な質は、能動的反復の試作によって向上していく中で、一瞬であった閃きが、質量を得た実感へと変わる。マチュール研究や下図制作による、閃きの細部(素材、技法)の決定方法について解説した。4.「本画」では、実際に本画を制作するフェイズとして、絵を描くことによって私は何を得たのか、そしてどのように次の制作へと繋げていくのかについて言及した。

第3章「提出作品における10のフェイズ」では、第1節で「百の木草も天照らす」について、第2節で「解けよやもどけ」について、それぞれを10のフェイズで解説した。

終章では、創作プロセスに、大きな枠組みとしてのフェイズ感覚を持つことによって、作品にどのような変化があったのかについてまとめた。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、一瞬の閃きが作品となるまでの創作プロセスを、禅の十牛図の論理を援用して論述したもので、秀逸なインスピレーション論ともいえるべき論考になっている。

十牛図は、禅の悟りにいたる修行を10段階で説明したもので、自己を牛に見立て、逃げ出した牛を見つけて飼いならすまで、つまり真の自己を見出す修行の過程を描いている。ただ筆者の十牛図への注目は、自身の制作を修行と捉えているからではなく、禅の悟りが、順々の修行の結果それに至るのではなく、修行の中のふとした契機で瞬間的に悟る閃き(インスピレーション)ともいえるべき性格をもっているからである。そして行方不明の牛を見つけ、暴れる牛を飼いならすまでの過程が、自身のまとまらないイメージを作品に収束、昇華する制作過程に置換されている。また徹底して自己に向きあう禅の姿勢が、「自己の奥底にあったものが、仲介者(きっかけ)を通して立ち現われてくるのだ」という筆者の認識に反映されている。

第1章「閃きと10のフェイズ」では、まず第1節「閃きの構造」で、閃きは唐突に脈絡なく起こること。それを誘発するために、筆者の場合、墨流しや石の文様、過去の下図やスケッチを切ってコラージュしたりすることを述べる。そして第2節「十牛図」で、十牛図各段階の説明と、十牛図に出会ったことで、混乱していた創作手順が自身の中で明快に整理された感動を述べている。第2章「創作のプロセス」では、その手順を4区分に整理し、十牛図の10段階と対応させながら説明する。4つに区分された手順は、①「閃き」、②「構想」、③「決断」、④「本画」からなり、①に十牛図の段階1・2、②に3・4、③に5~7、④に8~10を当てている。①の閃きは、意外な事実との出会いから着想まで、②は思考の拡散、③は思考の収束、④が創造から次への着想、とされている。そして第3章「提出作品における10のフェイズ」で、石見神楽に

取材した提出作品2点、「百の木草も天照らす」「解けよやもどけ」について、それぞれを①～④の手順で解説している。

10年ほど前、東京芸術大学と理化学研究所で「インスピレーション」研究が持ち上がったことがあるが、ほとんど具体化できずに頓挫した。本論文は表現者自身によるインスピレーション・創造論として、一つのモデルを見事に示した感がある。人によっては手順の整理がイメージ展開を拘束することも考えられるため、筆者も「私の場合」と断っているが、十牛図じたい汎用性をもつ論理構成のため、その援用による閃きから作品化までのプロセスの論述も、十分な説得力を持っている。筆者自身は高いイメージ力をもつ作家だが（第1章）、論述力、構成力にも優れた記憶に残る論文となっている。学位にふさわしい優れた論文として、審査員一同の高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

申請者は絵を描くことを着想から始まり画面への発露に至る間の、外的要因と内的要因の衝突・葛藤と自己受容の過程であると考え、論考では十牛図と自身の制作段階とを対比して論じている。十牛図とは仏教の悟りを牛の姿に、修行者を牧人に擬え、探しても見つからない、掴んだと思うが手中にはない、最終的には教えや悟りそのものの不在こそが真理であるという教えであるが、本論は、木や石の模様、マープリングやコラージュ等の偶発的な形から着想を得た申請者が、それらを“閃き”として十牛図の“悟り”に擬え、それらを探し、取得し、時には放棄しながら描き進める過程を考察した制作論である。

提出作品の「百の木草も天照らす」、「解けよやもどけ」は共に、申請者の故郷である島根県で多く見られる神楽を題材とした作品である。神楽囃子の太鼓の音が場の全てを震わせ、溶かし“神楽”そのものを抽出した視覚イメージとして作家自身に届いたように、画中には動的なイメージの墨や絵具の奔流の中に、神楽を舞う人体の部分や登場人物が描かれている。あるものは現実感を保ち描画されるが、あるものはピグメントに物質感を取って代われ形状のみ存在するものも見える。細部の繊細な描写と大胆で攻撃的とも言える構成とが相反しながら調和する魅力的な作品である。

申請者の作品は一見すると、画材や技法の持つ偶然性に主眼があるように見える。自身が“閃き”と呼ぶ着想の衝動に導かれるまま、構成上の伏線を張るように動的な仕事を展開してゆく。画面に無秩序とも見える動きを作ってから部分の描写でそれらを押さえ込み、最終的に張った伏線を回収していくような、言ってみれば少々乱暴な力任せの制作過程を想像させるが、それらの要素が収束した完成作品を鑑賞すると、理知的で整然とした仕事が見えてくる。流動性のある動きを感じさせる墨流しは、別の紙に施した墨流しの模様を日本画における古典模写のごとき手法で描き込んでいる。また荒々しいパレットナイフでのモールドも他の表現と接する部分では、パレットナイフの筆致を筆で描写し、表現の間隙を補完するような繊細な仕事も見える。つまり、偶然性が発揮される技法材料を制御の道具として残し、素描によって手に入れた対象の正確な情報は、その形状の整合性を放棄するといった偶発性と制御部分の提示において、良い意味で鑑賞者を裏切る見せ方に制作の本質が発揮されているように感じる。

自身の論考にもあるように、主題の着想から連想、選択、素描や絵画技法の全てが作品に集約しながら、十牛図「人牛俱忘」のごとく、作品の完成と共に全ての過程のみならずモチーフそのものでさえ等価で不在という存在に昇華させることが申請者の制作であると考えられる。それらを表現した提出作品としてこれらの作品を高く評価するものである。

制作に於ける日本画技法や、材料研究は非常に高い水準のものであると認められる。

審査会においては、審査員全員が一連の作品を学位にふさわしいものとして評価、判断し合格とした。

（総合審査結果の要旨）

申請者は東京芸術大学絵画科日本画専攻に入学し、修士課程・博士課程と成績優秀で合格、進学をしている。修了制作においては首席で卒業し、芸大美術館買い上げとなっている。学部2年次に行われる東北

スケッチ旅行に同行した折、酸ヶ湯近くの道端の雪解けの代赭色の地面の表情を細かく克明に写生している学生がおり、変わった視点を持った学生だなど心に留まったのを記憶している。

申請者は自然の中での閃きを大切に、琴線に触れた素材の形を自分自身の思考から練り直すという作業を繰り返し、作品を生み出していく。論文において「閃きと10のフェイズ」の題し、申請者の創作上の行程を禅の入門図として知られている北宋の廊庵禅師の「十牛図」に沿って解説する。閃き、構想、決断、本画と行程に沿って10のフェイズと割りあてることにより考えをまとめ、迷わずに突き進むことができる様になった。

博士課程においての作品制作は学部からの研究に対する熱意と自然物の意欲的な収集による引き出しが増えたことも絵の魅力がより輝きだした要因だと思う。

提出作品「解けよやもどけ」(227.3×545.4cm)「百の本草も天照らす」(162.1×162.1cm)は申請者の出身地である島根県石見地方の神楽を題材に描いている。

十牛図の行程に沿った本画作成において申請者の自然体な大きな動きを生かし筆を持つ手と腕の動きに加え、体を使った流れるような動きのある作品となっている。

今後も異なる題材に対しても、十牛図の行程を生かし、より完成度の高い作品が生まれるものと期待している。

今回の提出作品は大学美術館野村賞に選出された。本論文および提出作品を総合的にみて優秀と審査員全員が認め博士としての水準に達していると評価し、合格と判定した。